

「大正文学研究会」のこと 川副国基

最近、若い研究家たちの間にときどき「大正文学研究会」のことが話題にのぼり、会員のひとりであったわたしなども質問をうけることがある。

「現代日本文学大事典」（明治書院）が昨年の暮れに刊行され、それには編者としてわたしも名をつらねたのだが、この大事典には「大正文学研究会」という項目を採り、執筆には作家の野口富士男氏をわずらわした。この会の成立・運営の経過によく通じていたのは作家の倉橋弥一氏であったというが、この倉橋氏はすでになくなられたし、またこの会の主宰者格であった高見順氏も昨年病没された。こんにち、この会の終始をよく知っているのは前記、野口氏と、もうひとり作家の渋川驍氏とであろう。大事典のなかの野口氏の執筆枚数は原稿用紙四枚程度のものであるが、この会の大概を伝え

ている。

この会が発起されたのは昭和十五年の暮れであったという。発起の会に集ったのは高見・渋川・野口・平野謙などであったということになっている。主体は当時、有力な同人雑誌であった「日曆」の同人たちで、それに評論家の平野・矢崎弾・青柳優、研究家の稻垣達郎・吉田精一、わたしなどが加わったものであった。

満州事変・上海事変などが支那重慶としてだんだん深刻の度を深めていき、やがて太平洋戦争に突入していくという時代であった。社会意識の強い作家たちは、執筆を禁止され、禁止されないまでも、ほとんどもうものが書けないという時代であった。進歩的な思想家たちは予防拘禁という、こんにちでは考えられない処置で、警察の留置場に手廻しよく隔離

されるという時代であった。時局に迎合できない、書きたいものが書けなくなった作家たちが、しかしこういふ時期を無為にすごすことはない、ものの書けない時期には、寄り合つて、一時代前の大正文学の研究でもやってお互いの文学上の意見を交換し合い、連帯感を強めていこう、そういうかたちでも時局に抵抗しよう、というのがこの会のおこりであつたと思う。そして、そういうことなら、思いを同じくする研究者たちにも仲間になってもらおう、ということ、わたしなどもおかれて会員に誘われたということであつたように思う。

この会の会員の人数もはっきりとはわかつていない。三十名ぐらいだったということであるが、おそらく会員のリストなどは公けにされなかつたであろう。当時の高見氏は、治安当局からその動静を注目されていたいわゆる注意人物のひとつであつたにちがいないし、その高見氏の周囲に集る会合などというものは、当局の忌避するものであつたことが推定できる。なにかの思想事件から高見氏の大森の家が警察によつて家宅搜索をされ、その折、この会の会員のリストもわかつたらしく、わたしなども高見氏の関係すじだということ、移牒された世田谷署の特高係の取り調べをうけたことがあつた。当時のわたしは、小心で善良な東京府立一中の国語教師であつて、この会以外に高見氏との交渉は全くなかつたので

ある。その時代の弾圧のきびしさがわかるであろう。

わたしがこの会に出席したのは昭和十六年二月の、第二回の研究会からであつたように思う。神田の三省堂の向い側の白井という喫茶店が会場であつたという。前記、大事典中の野口氏の記述によれば、このときには作家の宇野浩二氏を招いて話を聞く会であつたとしてあるのだが、宇野氏を招いたのは八重州橋のそばの八重州園という当時東京でも大きな喫茶店（いまでもあるのだろうか、久しくあの辺を歩いてみたことがない）の二階の一室であつて、散会のころ特高係が検察に踏みこんできたように思うのだが、ちがうのであろうか。人間の記憶というものはあてにならない。しばらく野口氏の記述に従うべきであろう。そのときには若くしてすでに氣鋭さを示していた吉田精一氏が、刷り上つたばかりの自著の「明治大正文学史」を、わたしたちの目の前で宇野氏に呈した。若い、えらい学徒だなどわたしなどは大いに興奮をおぼえたものであつた。

新橋だつたか有楽町だつたか、蚕糸会館というビルの一室で訥々として語る和服姿の武者小路実篤氏を囲んだ会も覚えてゐる。赤坂溜池の文芸家協会の応接室で、なんとなく機嫌のわるい顔をした佐藤春夫氏を囲んだ会も思い出す。この会のとぎわたしははじめてフランス文学者の村上菊一郎と語つたかと思う。出席者はいつも十名ぐらいのものであつたが、

高見氏はまめによく出席していた。会の書記役みたいな仕事をしていてくれたのはいつも洪川氏だった。洪川氏の誠実さ熱心さがどのくらいこの会の継続運営に力となったかわからない。のち、この会の成果として、河出書房から「芥川竜之介研究」（昭一七・七）や「志賀直哉研究」（昭一九・六）を刊行するときも、洪川氏は大変につらい仕事をよくしのんで下さった。

出席者はもちろん、みんな明るい顔ではなかった。わたしなどには教師という定職があったのだが、書けなくなった作家や評論家たちほどのようにして生活をしておられたらう。心ならずも文学以外の仕事に携わって、それで生きながらえるというかたちであったのではないか。拭うても拭いきれない暗鬱さが、みんなの面貌に漂っていた。お互いに、けわしい時代を生きぬいているという連帯感が、文学研究ということを通じて、この会に出ることで、どれくらいわたしたちの心の支えになったことであろう。みんな耐えている、みんな苦しんでいる、そういう思いがしきりであった。もう、夜になると窓には、光が外に洩れないようにと防空用の暗幕が張られる時期になっていった。外は、きびしかったが、集って話をし合うと、文学は捨てられないという強い決意がわいた。数年前、近代文学館設立の議がもちあがったときの会合で、わたしは、高見・洪川・野口をはじめ、新田潤・吉田精一・

稲垣達郎などの健在な顔を眺めて、むかしのこの「大正文学研究会」を思い出し、涙ぐましい思いをしたのであった。

「近代自我の日本的形成」（昭和一八・七）という本は名著である。あの時期に、よくこの本がと思われる鋭い示唆に富んだもので、いまでもわたしは敬読している。著者は慶応出身の評論家矢崎弾であった。この矢崎ともわたしはこの会で知り会いになった。わたしに妙に親しくしてくれたことを忘れない。矢崎は同人雑誌「星座」の編集人をしていて、この誌にのった石川達三の「蒼氓」が第一回の芥川賞をうけたのであった。いわば三田派の矢崎が早稲田派の石川を推したことになる。当時、矢崎は尖鋭な評論を書き、わたしをこの会に誘ってくれた早稲田派の評論家青柳優と、まさに早慶相対立した好敵手の評論家であった。ボサツとした、しかし骨太い相貌は青柳とも相通じていた。二人とも英才を抱いたまま、惜しくもはやく世を去ってしまった。

会合にはよく神田の喫茶店が使われた。もちろん、太平洋戦争がはじまってからのことであるが、ある夜の会合で、当時情報局につとめていた平野謙が、わたしたちに時勢の逼迫を説き、すでに結成された「文学報国会」に入会しなければ本を出版するにしても紙を割り当ててもらえなくなるだろうと警告した。もともと、文学の国家的統制には反対のものばかりが会員であった。反対だからこそ、ものが書けなくなり

このような会も生まれたものだったのである。その夜の議論は沸騰した。平野の発言は好意的なものだったが、そして時勢を明察したものだのだが、このときばかりは平野が官僚の手先きのようにも映じ、質疑は平野に集中したかたちであった。が、みんなも結局、時勢がそこまで来ていることをみとめざるを得なかった。理想が、きびしい現実に負けただのである。みんなはだんだん「文学報国会」の評論家の部へ平野の紹介で会員になっていくほかはなかった。わたしなどは、この「文学報国会」の国文学者の部に入会の誘いが来なかったことをひそかに誇りとしていたのだが、わたしもまたついに評論家の部に入会した。戦時下文学者たちの抵抗の限界がこういうところにあったわけだ。すでにわたしたちの会合はいつも警察の特高係の監視下にあったのだが、あの手この手を用いていじめ抜かれ、結局、心にもない挫折・妥協に追いこまれていった当時の良心的な文学者たちの経路は、わたしなどにはよくわかる。

伊藤整氏はこの「大正文学研究会」のことを戦時下文学者たちの抵抗のひとつのすがたとしてとらえておられるが、その点はたしかに当たっている。そして、わたしなどは、はじめでこの会で、作家・評論家たちと心のつながりを持ち得た。

高見順氏が近代文学館を発起された、そのことの起りが、この「大正文学研究会」にあったとする、前記大專典中の野

口氏の記述もおそらく正しいであろう。「大正文学研究会」時代の、作家・評論家とわたしども文学史家との交流を、高見氏は好ましい、有益なものとしてながく忘れなかったちがいない。こんにち、近代文学館の充実・発展のために、作家・評論家と文学史家たちが仲よく力をあわせているほおえましい姿を見るたびに、わたしも、野口氏と同じことを思うのである。(一九六六・一)

△追記▽

編集部の催促をうけて昨年暮れの十二月に入って匆卒にこの原稿を書いてお渡ししたのだった。それから半月ほど経ってから、雑誌「日曆」の第五十八号(戦後復刊したもの、十二月十日発行)を寄贈して戴いたのだが、その号に奇しくもまた渋川驍氏が「大正文学研究会と高見順」という文章を書いておられた。

渋川氏の資料はいちばん信頼度の高いもので前記野口氏の文章も渋川氏の資料に負っているものだが、渋川氏のその文章によると大正文学研究会の第二回目は、やはり宇野浩二氏を囲んで神田の喫茶店白井でおこなわれたことになっている。八重州園での会はその後で、広津和郎氏を主客として招いたものであったが、その会にはまた宇野浩二氏も出席されていたことがわかった。わたしは、もみあげの濃く


長い宇野氏の印象だけを残して、かんじんの広津氏を忘れていたことになる。特高係がその会を襲ったとは渋川氏の文章にも書いてある。渋川氏は川副のこの会への参加は第五回目の佐藤春夫氏を招いた会からだとして記しておられるけれども、それ以前の四回目の武者小路氏を招いた会にはもう出席していたことをたしかに覚えていたので、おそらくわたしのこの会への参加は第三回目の昭和十六年三月二十五日の久保田万太郎氏を招いた会からであったと思う。

あれは昭和十七・八年ごろだったろうか。井の頭線の浜田山近くの麦畑のなかの道でぼったり野口富士男氏に逢ったことがある。氏も近く南方に従軍するのだとそのとき言われたのだった。大正文学会のなかの作家たちはつぎつぎに報道班員として海外に去っていくようになり、はげしい戦争の渦のなかでこの会も自然消滅のかたちになったのだったと思う。だんだん記憶がよみがえってきたのでこれを記しておく。

研究室だより

◇「江戸文人展」の企画がはじまってから、ただでさえ活気にみちた研究室が、がぜんエキサイトしてまいりました。各新聞紙上にこのことが出てから、電話は鳴りっぱなし。こんどは蕎麦やさんが出たんだらうとおもって、各先生がたの注文票片手に、「もしもし、キツネを……」といきなりはじめたら（もう忙しくてアタマに来て）、「あのう、わたくしはオギエソライの子孫ですが……」と、そのかたは、萩生徂徠の子孫と名のられる方の八番目のかたでした。

◇卒業生の方々が記念に送っていった三〇〇冊にものぼる図書が運びこまれてきました。新しい本の顔を見るのはいつも嬉しいことですが、原先生が、パリへの御出発前気になさっていた「賢治」関係の絶版の本も殆ど揃って入っていて安心しました。早速この次のお便りに記さなくては。にこにこ笑いながらその本の背をなでて部屋を出てゆかれた高田先生と折り返しに入っていらした松野先生が同じ表情としぐさをなさったのにはついふき出しました。

◇十一月には、インパ戦争のなかをくぐりぬけて、原先生がヨーロッパ・インドの長すぎる（)旅から帰られました。ヨーロッパの女の眼玉と文学の関係やら、インドの太陽は手のひらをひるがえすように落っこちることやら、千枚あまりのカラ・スライドと、お土産話に、ためいきをついたり、お腹の皮をよじらしたり……。でも、先生は、ソルボンヌやロンドン大学では、研究者相手にレクチュアやら、毛筆の揮毫などなさって、ひとときわ貫録がでてまいりました。

(成)